Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-04

エスノグラフィー・ケーススタディ・サーベイリサーチ

坂下，昭宣

(Citation)
国民経済雑誌,190(2):19-30

(Issue Date)
2004-08

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/00055943

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/00055943

エスノグラフィー・ケーススタディ・サーベイリサーチ

坂　下　昭　宣

いわゆる「実証研究」には，少なくとも3タイプのものが含まれる。エスノグラフィー，ケーススタディ，サーベイリサーチである。しかしながら，これら3タイプの実証研究は相互の違いや関係が言及されることは少なかった。「フィールドワーク」対「サーベイリサーチ」，または「定性的方法」対「定量的方法」といった二項対立的分類が，これら3タイプの実証研究の間の重要な違いや相互関係を曖昧にさせたからである。

本稿はこうした問題意識に立った上で，(1)エスノグラフィーとケーススタディの分析哲学上の基本仮定の違いを明らかにすること，(2)ケーススタディとサーベイリサーチの方法論上の違い及び相互関係を明らかにすること，が目的である。

キーワード　存在論，認識論，方法論

1　はじめに

社会的世界や組織的世界の経験的研究をさしあたり「実証研究」と呼ぶとすれば，それらは従来，(1)「フィールドワーク」対「サーベイリサーチ」，(2)「定性的方法」対「定量的方法」といった二項対立で呼ばれることが多かった。しかしながら，このような二項対立的分類は正確なものではない。なぜなら(1)については，フィールドワークの中にエスノグラフィーとケーススタディという異質のものが含まれているにもかかわらず，その区別ができていない。また(2)についても，定性的方法の中にエスノグラフィーとケーススタディが含まれているにもかかわらず，それが区別できていないからである。

そうであるなら，問題はどこにあるのだろうか。フィールドワークが定性的方法を指しサーベイリサーチが定量的方法を指すことはほぼ問題ない。問題は，フィールドワークや定性的方法といわれるものの中に実はエスノグラフィーとケーススタディという異質のものが含まれるのだということ，このことの認識が欠けていたという点である。

いわゆる「実証研究」には，少なくとも3タイプのものが含まれる。エスノグラフィー，ケーススタディ，サーベイリサーチである。しかしながら，これら3タイプの実証研究は相

互の違いや関係が言及されることは少なかった。上述の「フィールドワーク」対「サーベイリサーチ」,「定性的方法」対「定量的方法」といった二項対立的分類が，エスノグラフィー，ケーススタディ，サーベイリサーチという3タイプの実証研究の間の重要な違いや相互関係を曖昧にさせたといえるだろう。

本稿はこうした問題意識に立った上で，(1)エスノグラフィーとケーススタディの分析哲学上の基本仮定の違いを明らかにすること，(2)ケーススタディとサーベイリサーチの方法論上の違い及び相互関係を明らかにすること，が目的である。

2　分析哲学上の基本仮定

「フィールドワーク」対「サーベイリサーチ」という二項対立的分類は調査方法の違いを表現し,「定性的方法」対「定量的方法」という二項対立的分類はデータタイプの違いを表現しているにすぎない。このような分類方法ではエスノグラフィーとケーススタディがともにフィールドワークまたは定性的方法に属することになり，両者が持っている分析哲学上の基本仮定の違いを区別できない。

分析哲学上の基本仮定の違いとは，バーレル&モーガン（1979）が主観主義社会学（その典型は解釈主義）と客観主義社会学（その典型は機能主義）の基本仮定の違いとして述べた著名な図式のことである。[1] 私は，エスノグラフィーとケーススタディの根本的な違いは主観主義社会学と客観主義社会学の基本仮定の違いだと考えている。したがって，ここではまず主観主義社会学と客観主義社会学の基本仮定の違いについて論究する。

次の図1に示すように，バーレル&モーガンは主観主義社会学と客観主義社会学の違いを,「存在論」「認識論」「人間論」「方法論」という4つの次元で比較した。

図1　主観主義社会学と客観主義社会学

主観主義社会学		客観主義社会学
唯名論	←――（存在論）――→	実在論
反実証主義	←――（認識論）――→	実証主義
主意論	←――（人間論）――→	決定論
個性記述主義	←――（方法論）――→	法則定立主義

（出所：バーレル&モーガン，1979，邦訳，P.6 より作成）

存在論（オントロジー）とは社会的世界の存在に対する研究者の基本仮定であり，客観主義社会学が「実在論」の立場に立つのに対して主観主義社会学は「唯名論」の立場に立つ。実在論の立場では，社会的世界は成員の認識とは独立に，客観的実在として存在する構造である。これに対して唯名論の立場では，社会的世界は実在する構造ではなく，成員の認識を通じて社会的に構成されたものである。

認識論（エピステモロジー）とは研究者が社会的世界をどう認識するかに関する基本仮定であり，客観主義社会学が「実証主義」の立場を採るのに対して，主観主義社会学は「反実証主義」の立場を採る。実証主義は研究者が社会的世界を外部から直接認識できるとする立場である。これに対して反実証主義は，研究者は社会的世界の成員の認識を通してのみ，間接的に社会的世界を認識できるとする立場である。

人間論とは研究者が人間をどう見ているかに関する基本仮定であり，客観主義社会学が「決定論」の立場に立つのに対して，主観主義社会学は「主意論」の立場に立つ。決定論の立場に立つ客観主義社会学は，人間の行為は状況や環境によって完全に決定されていると仮定している。これに対して主意論の立場に立つ主観主義社会学は，人間は自由意思を持って行為していると仮定している。

方法論（メソドロジー）とは社会的世界の研究方法に関する基本仮定であり，客観主義社会学が「法則定立主義」の立場に立つのに対して，主観主義社会学は「個性記述主義」の立場に立つ。法則定立主義の立場では，社会的世界は自然現象のように反復的に生じる事象と見なされるので「変数」で記述され，諸変数間の因果関係が説明される。これに対して個性記述主義の立場では，社会的世界は歴史現象のように一回限りの特定的事象と見なされるので「非変数」として記述される。

以上を要約すれば次のようになる。客観主義社会学は社会的世界が成員の意識の外に事物として実在すると仮定しているので（実在論），研究者はそれを成員の意識作用にまで還元する必要はなく，外部からの観察を通じて直接認識できると仮定している（実証主義）。そこでは社会的世界は反復的に生じる事象として変数で記述され，変数間の因果法則が説明される（法則定立主義）。

これに対して主観主義社会学は，社会的世界は成員の意識作用を通じて社会的に構成された意味世界だと仮定しているので（唯名論），研究者は成員自身の一次的意味構成を二次的に再構成することによってのみ，意味的構成物としての社会的世界を認識できると仮定している（反実証主義）。こういった点では，主観主義社会学は常に「二重の意味構成の学」である[2)]。そこでは社会的世界は一回限りの特定的事象として非変数扱いされ，個性把握的に記述されるのである（個性記述主義）。

3 「エスノグラフィー」対「ケーススタディ」

エスノグラフィーは本来，文化人類学の領域で発達した研究であって，ある特定の文化を個性把握的に記述しようとした研究である。したがってそれは，とくに単一ケースのケーススタディ（以下，単一ケーススタディと呼ぶ）と非常に似ている。単一ケーススタディも何らかの研究対象を記述することを主要な目的としているからである。もっとも，ケーススタ

ディは必ずしも文化を研究対象にするわけではないから，この点ではエスノグラフィーとは異なっている。ただ，たとえば特定の組織文化を研究対象にする場合には，エスノグラフィーとケーススタディは非常に似たものとなる。

しかしそれでもなお，エスノグラフィーとケーススタディには非常に重要な違いがある。その根本的な違いは，上にバーレル＆モーガンの図式を使って示した分析哲学上の基本仮定の違いである。エスノグラフィーは主観主義社会学に属し，ケーススタディは客観主義社会学に属している。したがって，両者は分析哲学上の基本仮定の点で以下のように根本的に異なっている。

まず第1に，エスノグラフィーは研究対象である文化を，その成員が社会的に構成した意味世界だと仮定している。これが，研究対象を「構成物」として見る存在論上の基本仮定である。これに対してケーススタディは，それが文化を研究対象とする場合であっても，文化を成員の認識とは独立の，したがって成員の意識の外にある「実在物」だと仮定している。いわば，文化を自然現象と同様な「事物」だと見なしているのである。

第2に，エスノグラフィーとケーススタディは，上述した存在論上の基本仮定の違いを受けて，認識論上の基本仮定の点でも次のように異なっている。エスノグラフィーは文化を，その成員が社会的に構成した意味世界だと仮定しているので，成員の一次的構成物を二次的に再構成することによって文化を認識しようとする。エスノグラフィーは成員の認識を通じてのみ，文化を認識できるのである。これが，エスノグラフィーが依拠する認識論上の反実証主義である。これに対して，ケーススタディは文化を成員の認識とは独立の実在物だと仮定しているので，それを成員の意識作用にまで還元することはなく，研究者が直接認識しようとする。これが，文化のケーススタディが依拠する認識論上の実証主義である。

第3に，エスノグラフィーと単一ケーススタディは，方法論上ではともに個性記述主義ではあるが，個性記述の意味が異なっている。すなわち，エスノグラフィーでは文化の成員が共有している意味世界の個性把握的記述になるが，単一ケーススタディでは同じ文化の個性把握的記述であるとはいっても成員の意味世界にまで踏み込むことはない。研究者が直接認識した，事物としての文化現象の記述である。この意味では，エスノグラフィーは文化をそもそも非変数と見ている。これに対して，文化の単一ケーススタディはそれを変数と見た上で，その変数の特定値（＝変数値）を記述していると言えるのである。

以上の関係をバーレル＆モーガンの図式に倣って示すと，次の図2のようになる。ただ，この図ではバーレル＆モーガンの図式とは異なって，方法論上の基本仮定がともに個性記述となっている点に注意して欲しい。それはここでのケーススタディを，エスノグラフィーと直接比較するため，単一ケーススタディに限定しているからである。単一ケーススタディは，イン（1994）が言うところの「記述的ケーススタディ」となるだろう。

図2　「エスノグラフィー」対「単一ケーススタディ」

エスノグラフィー（主観主義社会学）		単一ケーススタディ（客観主義社会学）
構成物	←（存在論）→	実在物
反実証主義	←（認識論）→	実証主義
個性記述（非変数）	←（方法論）→	個性記述（変数値）

インは，「記述的ケーススタディ」と「説明的ケーススタディ」を区別している。記述的ケーススタディとは，ある現象の記述であって説明ではない。言い換えれば，事物としての現象を記述するのであるが，その現象の原因を説明することではない。しかし，事物としての現象（＝実在物）を対象にしているので，将来，複数ケースのケーススタディ（以下，複数ケーススタディと呼ぶ）へと拡張することで，その現象の原因を説明する研究へと発展させることはできる。

これに対して，説明的ケーススタディとは事物としての現象の原因を説明しようとするものであって，この場合，原因とはその現象に先立つ独立の現象（むろん，事物）でなければならない。言い換えれば，説明的ケーススタディとは事物としての諸現象間の因果仮説を発見しようとするケーススタディである。

説明的ケーススタディは原理的には，現象を記述する変数の数（1つの結果変数と1つ以上の原因変数）以上のケース数が必要である。なぜなら，たとえばYという現象の原因がXという現象だと仮定したとき（このとき，現象を記述する変数の数は2），その因果関係を説明することはX-Y座標軸からなる平面上の直線または曲線の方程式を求めることであるが，それには（X，Y）座標によって示される2つ以上の点，言い換えれば2つ以上のケースが必要だからである。このようにして一般には，1個の結果変数をP個の原因変数で説明するケーススタディをデザインするには，(P+1) 個以上のケース数が必要になる。それゆえ，説明的ケーススタディは複数ケーススタディになるのである。

以上からわかるように，単一ケーススタディを想定する限り，それが如何に多くの現象を対象としていようとも，そのケースは多次元空間上の1つの点として表現されるに過ぎないのであるから，諸現象間の因果関係の説明にはなりえない。つまりそれは，方法論的には個性記述となるのである（図2参照）。しかしながら見たように，単一ケーススタディの個性記述はエスノグラフィーとは異なって，実在物つまり事物としての現象の記述である。したがってそれは，ある特定の文化を個性豊かに記述しているとしても，成員が社会的に構成した意味世界としての文化の記述なのではない。研究者が直接認識することで記述した，1つの変数値としての文化である。この点が，エスノグラフィーとの決定的な違いである。

しかし他方，文化の単一ケーススタディは事物としての一文化現象を変数値として記述し

ているゆえに，将来，複数ケーススタディへと拡張することで，そうした文化現象の原因や結果を説明する研究へと発展させることができる。これに対して，エスノグラフィーはそもそも文化を非変数と見ているのであるから，文化の因果関係を問題にすることはない。エスノグラフィーにおける文化は成員が社会的に構成した意味世界としての文化であって，一個独特のものである。

エスノグラフィーの典型例としては，スマーシッチ（1983）の研究がある。彼女はある保険会社のフィールドワークによって，組織文化が「共有された意味体系」として存在すること，及びそれが成員間のシンボリックな意味解釈過程（＝意味構成過程）を通じて生成し，維持されていることを観察した。[3)]

この研究に典型的に見られるように，エスノグラフィーはある特定の文化の解釈主義的な記述である。そこでは，文化は成員によって共有された意味体系として存在している。意味体系のこの共有感，あるいは当たり前の感覚はエスノメソドロジストが社会的構造感と呼んだ自然的態度に近い感覚であって，それなしには組織的な諸活動が持続的には生じないものである。

意味体系の共有感は，スマーシッチの研究に見られるように，さまざまなシンボルを成員が間主観的に意味解釈することから構成され維持される。それは，成員が自分たちの経験を意味あるものとして構成し（＝一次的構成），維持している間主観的な意味世界としての文化である。そういった一次的構成物としての文化を，スマーシッチの研究は個性把握的なエスノグラフィーとして生き生きと再構成し（＝二次的構成），記述しているのである。

4　「ケーススタディ」対「サーベイリサーチ」

上で見たように，ケーススタディは存在論上の実在論，及び認識論上の実証主義を基本仮定としており，この点がエスノグラフィーとの決定的な相違点である。ただ，方法論の点では単一ケーススタディと複数ケーススタディでは異なる。単一ケーススタディは記述的ケーススタディとなり，事物としての現象を個性豊かに記述することができる。これに対して，複数ケーススタディは通常，説明的ケーススタディとなる。ただし，この場合には現象を記述する変数の数以上のケース数が必要であるのは前に見たとおりである。[4)]

このように，複数ケーススタディの主要な目的は諸現象間の因果関係の説明であるが（＝説明的ケーススタディ），それはバーレル＆モーガンの前掲図式中の用語で言えば法則定立主義である。したがって，法則定立主義の法則とは因果法則に他ならない。[5)]

他方，サーベイリサーチは客観主義社会学を代表する調査方法である。それは存在論上の実在論，認識論上の実証主義，方法論上の法則定立主義に立つ。したがってサーベイリサーチは，説明を目的とした複数ケーススタディとは，形式上，違いがないようにも見える。事

実，両者は分析哲学上の基本仮定においてはまったく同じ立場に立っている。

しかしながら，存在論上の実在論，及び認識論上の実証主義という点では両者に違いはないものの，方法論上の法則定立主義という点では両者の立場に重要な意味上の違いがある。以下では，こうした点について論究する。

第1の論点は文字通り，法則定立という場合の意味である。因果関係の説明を目的とした複数ケーススタディでは，現象を記述する変数の数以上のケース数が必要であるのは前に見たとおりである。これによって各ケースは，原理的には1つの結果変数と1つ以上の原因変数からなる多次元空間上の複数の点としてプロットされる。このとき，ある現象の原因を1つ以上の現象によって説明するとは，このような多次元空間上の複数の点がかたちづくる多次元平面または多次元曲面の方程式を発見しようとすることである。

因果関係の説明を目的とした複数ケーススタディ（＝説明的ケーススタディ）はこのようにして因果仮説を発見しようとする。したがって，説明的ケーススタディにおける法則定立とは因果仮説の発見を目的とするものであって，その研究は「仮説発見型の研究」として位置づけることができる。

しかしながら，説明的ケーススタディによって発見した因果仮説は「分析的一般化」とはなりえても，「統計的一般化」とはなりえない。この点は，イン（1994）が強調しすぎるほど強調した重要な論点である。ここで，分析的一般化とは理論命題への一般化である。また，統計的一般化とは推測統計学の原理に基づいて，サンプルのパラメタ（＝標本推定値）から背後母集団のパラメタ（＝理論値）を推定したり，そうした理論値がゼロではないことを検定したりすること（＝帰無仮説の有意性の検定）である。要するに，説明的ケーススタディによって発見した因果仮説は理論上の一般化とはなりえても，推測統計学の原理を用いた仮説検証という意味での一般化とはなりえないということである。

説明的ケーススタディによって発見した因果仮説が統計的一般化となりえない理由は，複数ケースからなるケース群自体がランダムサンプリングによって抽出したサンプルではないからである。後述するように，ケーススタディにおけるケースは，研究者自身の洞察や先行研究の理論をもとにデザインされた何らかの調査枠組みを通じて選択的に抽出される。したがって，そうしたケースからなるケース群はいわゆる母集団を代表するサンプルではなく，それゆえケース群の因果関係から母集団の因果関係を推定したり検定したりすることはできない。

こうした本質は，ケースの数を増やしていった場合でも変わらない。ケースの数を増やしていったとしても，そのケース群は母集団からランダムサンプリングによって抽出したサンプルではないからである。ただ，増やしていったケースが当初のケース群から発見された因果仮説と矛盾しないのであれば（この手続きは「追試」と呼ばれる），そのことによって当初

の因果仮説の確証度は高まる。しかし，因果仮説の確証度の高まりは因果仮説の統計的検証そのものではない。その意味で，説明的ケーススタディの方法論である法則定立とは因果法則の検証ではなく，あくまでも因果法則の発見なのである。

以上に対して，サーベイリサーチにおける方法論上の法則定立とは，因果法則の推測統計学的な検証である。そこでは，サンプルのパラメタ（＝標本推定値）から背後母集団のパラメタ（＝理論値）を推定したり，そうした理論値の帰無仮説の有意性を検定したりすることが行われる。いわばサンプルの因果関係から背後母集団の因果関係を推定したり，それを統計的に検定したりするわけである。こうした手続きによって得られる結論は単にサンプルについてのものではなく，サンプルから統計的に推測される背後母集団についてのものであるという意味で，インの言う「統計的一般化」である。それは因果仮説の統計的検証に他ならないのであって，サーベイリサーチにおける方法論上の法則定立という言葉が真に意味するところのものである。

以上に述べた説明的ケーススタディとサーベイリサーチの違い，及び相互関係をバーレル＆モーガンの図式に倣って示したものが次の図3である。この図では方法論上の基本仮定がともに法則定立となっているが，説明的ケーススタディではそれは「分析的一般化」であるのに対して，サーベイリサーチではそれは「統計的一般化」である。この意味で，前者は「仮説発見型の研究」になり，後者は「仮説検証型の研究」になる。

図3　「複数ケーススタディ」対「サーベイリサーチ」

複数ケーススタディ（客観主義社会学）		サーベイリサーチ（客観主義社会学）
実在物	←（存在論）→	実在物
実証主義	←（認識論）→	実証主義
法則定立	←（方法論）→	法則定立
（分析的一般化 仮説発見）		（統計的一般化 仮説検証）

第2の論点は分析対象の抽出方法に関するものである。サーベイリサーチの場合には，直接の分析対象はサンプルであり，これはランダムサンプリングによって抽出される。このサンプルのランダム性は重要である。サンプルはこのランダム性によって背後母集団の「代表性」を獲得し，そのことが背後母集団のパラメタ推定や検定を可能にするからである。

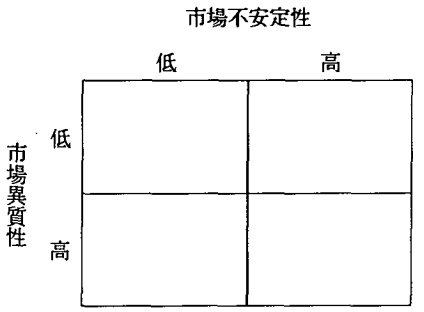
これに対して，説明的ケーススタディは因果仮説の検証ではなく発見を目的としているので，分析対象である複数ケースはランダムサンプリングによって抽出されるのではない。むしろ逆に，研究者自身の洞察や先行研究の理論をもとにデザインされた何らかの調査枠組みを通じて選択的に抽出される。それゆえ，説明的ケーススタディにおけるケース群は，サーベイリサーチにおけるサンプルとは明確に異なる。イン（1994）の言葉を借りて言えば，ケー

ス群は小規模なサンプルなのではない。したがってまた，当初のケース群にその後，ケースを追加して追試を行い，それによって因果仮説の確証度が高まったとしても，それは統計的一般化なのではなく，それゆえ因果仮説の検証なのではない。要するに，因果仮説の検証はサーベイリサーチによってしか行えないということを重ねて銘記しておくべきである。

一方，説明的ケーススタディにおいては，何らかの調査枠組みが重要である。この調査枠組みは研究者自身の洞察や先行研究の理論をもとにデザインされる。その典型例が野中（1974）の研究である。彼はコンティンジェンシー理論の命題をもとに，市場の多様性（市場異質性及び市場不安定性）と組織の分化（水平的分化及び垂直的分化）の関係を調査する枠組みを巧みにデザインして，両者の因果関係を特定化する仮説を発見している。

野中の作業仮説は，市場の多様性は組織に情報処理の負荷を増大させるので，組織はそれに対処するため相応の構造分化を遂げる，というものだった。彼はこの作業仮説を特定化するためある調査枠組みをデザインし，4ケースからなる複数ケーススタディを行っている。彼の調査枠組みは次の図4のごときものである。まず縦軸，横軸にそれぞれ市場異質性，市場不安定性を目盛ることで，市場多様性の類型が4つできる。次に，各市場類型に属すると予想される高業績企業4社をそれぞれ抽出する。そして，この4社の市場多様性の程度と組織構造の特徴を調査する。次に，市場多様性についての4社データを使って，各社がはじめに予想した市場類型にそれぞれ属するか否かを実際に確認する[6]。最後に，組織構造についての4社データを詳細に比較する。

図4　説明的ケーススタディの調査枠組み（範例）



野中は以上のような複数ケーススタディによって，組織は異なった市場多様性のもとでそれぞれ異なった組織構造を分化させ，その結果として高業績を達成するという因果仮説をより精緻に特定化して見せた。その学術的貢献は言うまでもないことであるが，ここではむしろ彼の巧みな調査枠組みに注目したい。彼はコンティンジェンシー理論の命題をもとに独自の調査枠組みをデザインし，それに基づいて4つのケースを選択的に抽出している。そして，それらをはじめの枠組みの中に位置づける確認作業をやった後に，相互に組織構造の比較分

析を行っているのである。このように，仮説発見型の説明的ケーススタディを手際よく行うには，研究者自身の洞察や先行研究の理論をもとにデザインされた何らかの調査枠組みが重要な働きをするのである。

5 おわりに

ここでは再度，「エスノグラフィー」「ケーススタディ」「サーベイリサーチ」の違いや相互関係について要約しよう。エスノグラフィーは分析哲学上の基本仮定としては主観主義社会学の立場に立ち，存在論上の唯名論，認識論上の反実証主義，方法論上の個性記述主義に立つ。それは，成員が社会的に構成した意味世界（＝社会的構成物）としての文化を，成員の視点を通して認識する（認識論上の反実証主義）。また，方法論的には文化は非変数と見なされ，一個独特のものとして個性豊かに記述されるのである（個性記述主義）。

これに対して，ケーススタディ及びサーベイリサーチは客観主義社会学の立場に立つので，研究される社会的世界や組織的世界は存在論上の実在物（＝事物）としての現象である。それは成員の意識作用に還元されることなく，研究者によって直接認識される（認識論上の実証主義）。また，それらの現象は方法論的には変数として扱われる。ただ，単一ケーススタディと複数ケーススタディでは方法論が異なり，さらに複数ケーススタディとサーベイリサーチでは方法論の意味が異なる。

まず，単一ケーススタディは現象の記述にとどまるので（記述的ケーススタディ），方法論上は個性記述主義である。しかしこれは，事物としての現象を特定の変数値として記述していることを意味するから，エスノグラフィーにおける個性記述主義とは決定的に異なる。これに対して，複数ケーススタディは現象の原因を説明できるので（説明的ケーススタディ），方法論上は法則定立主義である。

次に，複数ケーススタディとサーベイリサーチは方法論上はともに法則定立主義であるが，その意味するところが異なっている。複数ケーススタディにおける法則定立主義は因果仮説の発見を意味しており，インの言う分析的一般化に当たる。これに対して，サーベイリサーチにおけるそれは因果仮説の検証を意味しており，インの言う統計的一般化に当たる。複数ケーススタディにおける法則定立主義が分析的一般化を越えて統計的一般化となりえないのは，分析対象のケース群がいわゆるサンプルではないからであり，それゆえ背後母集団を代表していないからである。

注

1) ここで，機能主義とはマートン（1949）の機能分析のパラダイム，パーソンズ（1951a, b）の構造－機能分析，及び機能要件分析（AGIL 図式）を指す。また，解釈主義とはシュッツ（1932, 1970）

の現象学的社会学，ガーフィンケル (1967) 等のエスノメソドロジー，及びブルーマー (1969) に代表されるネオ・シカゴ学派シンボリック相互作用論を指す。

2) 行為者の「一次的構成物」を研究者が「二次的構成物」として再構成する「二重の意味構成の学」はシュッツ (1932, 1970) を嚆矢とするが，それは解釈主義一般の特徴でもある。これについての詳細な論究は，坂下 (2002) を参照。

3) スマーシッチ (1983) についての詳細な論究は，坂下 (2002) を参照。

4) 複数ケーススタディが，単に複数ケース間の何らかの現象の記述比較という場合もありうる。「比較ケース法」(イン，1994) というものがこれに相当する。しかしこの場合でも，複数ケース間の現象の違いを引き起こしている原因を明らかにしようという方向に進むなら，それはもはや説明的ケーススタディへと発展しているのである。

5) 複数ケーススタディの主要な目的は，説明的ケーススタディとして諸現象を変数で記述し，諸変数間の因果法則を説明しようとするものであるが，そうした説明の前段階として各ケースごとに諸現象の記述を行わなければならない。このような記述を通じて得られたデータが，諸変数の「変数値」となるわけである。以上からわかるように，現象の記述は複数ケーススタディの真の目的ではなく，現象の説明がその真の目的なのである。

6) ただ実際には，この確認作業の結果，低異質性・低不安定性のセルには該当する企業がなかった。

参 考 文 献

Blumer, H. (1969), *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*, Prentice Hall. (後藤将之訳，『シンボリック相互作用論——パースペクティヴと方法——』勁草書房.)

Burrell, G. & G. Morgan (1979), *Sociological Paradigms and Organizational Analysis*, Heinemann. (鎌田伸一・金井一頼・野中郁次郎訳，『組織理論のパラダイム』千倉書房.)

Garfinkel, H. (1967), *Studies in Ethnomethodology*, Englewood Cliffs: Prentice Hall.

Geertz, C. (1973), *The Interpretation of Cultures: Selected Essays*, Basic Books. (吉田禎吾・柳川啓一・中牧弘允・板橋作美訳，『文化の解釈学』I・II，岩波書店.)

Merton, R. K. (1949), *Social Theory and Social Structure*, Glencoe, Ill.: Free Press. (森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳，『社会理論と社会構造』みすず書房.)

Parsons, T. (1951a), *The Social Systems*, London: Tavistock; Glencoe, Ill.: The Free Press. (佐藤勉訳，『社会体系論』青木書店.)

Parsons, T. & E. A. Shils (eds.) (1951b), *Toward a General Theory of Action*, Cambridge, Harvard University Press. (永井道雄・作田啓一・橋本真訳，『行為の総合理論をめざして』日本評論社.)

Pondy, L. R., P. J. Frost, G. Morgan, & T. C. Dandridge (eds.), *Organizational Symbolism*, JAI Press.

Schutz, A. (1932), *Der Sinnhafte Aufbau der Sozialen Welt*, 〔*The Phenomenology of the Social World*〕, London: Heinemann. (佐藤嘉一訳，『社会的世界の意味構成』木鐸社.)

Schutz, A. (1970), *On Phenomenology and Social Relations*, (*edited by H. R. Wagner*), The University of Chicago Press. (森川真規雄・浜 日出夫訳，『現象学的社会学』紀伊国屋書店.)

Smircich, L. (1983), "Organizations as Shared Meanings", in L. R. Pondy, P. J. Frost, G. Morgan, & T. C. Dandridge (eds.), *Organizational Symbolism*, JAI Press, pp. 55-65.

Yin, R. K. (1994), *Case Study Research, 2nd ed.*, Sage Publications Inc. (近藤公彦訳,『ケーススタディの方法・第2版』千倉書房.)

坂下昭宣 (1999),「組織シンボリズム研究の視圏」『国民経済雑誌』第179巻第6号.

坂下昭宣 (2001),「二つの組織文化論：機能主義と解釈主義」『国民経済雑誌』第184巻第6号.

坂下昭宣 (2002),『組織シンボリズム論――論点と方法――』白桃書房.

坂下昭宣 (2003),「「意味の組織論」としての組織シンボリズム論」『組織科学』第37巻第2号.

野中郁次郎 (1974),『組織と市場』千倉書房.